Journal of National Fisheries University 56 (1) 11−20 (2007)

独善的還元主義への諷刺的まなざし ——ゼイディ・スミス『ホワイト・ティース』小論

高本孝子

Satirical Gaze on Self-righteous Reductionism in Zadie Smith's *White Teeth*

Takako Takamoto

Zadie Smith's *White Teeth* (2000) is commonly considered to be a novel describing multiculturalism in contemporary London, but the scope of the novel is actually far larger than that. The author's main concern is to depict satirically the characters who devote themselves wholeheartedly to particular doctrines; they presume those doctrines will provide them with clear-cut solutions to any complicated problem in life, even that of preserving a sense of one's own personal identity. Throughout the novel, we detect hints that self-righteousness derived from monistic reductionism can lead to dangerous exclusivism. Smith shows that such concepts as can be found in reductive ideologies —— "purity","truth" and "roots" —— are nothing more than illusion, and that their quests can be morally dangerous; rather, she encourages mixing of peoples in order to make the world a better and safer place to live. Moreover, by adopting intertextuality, she also targets her criticism of reductionism at those ideologists who allegedly abused Nietzscheanism, including Francis Fukuyama and Nazi philosophers. Her "superman" is, unlike theirs and even Nietzsche's, a man who does not resort to any particular dogma as easy means to seek out a sense of identity but accepts existential anxiety as well as eternal recurrence.

Key words : Zadie Smith, *White Teeth*, reductionism, Francis Fukuyama, Nietzsche, superman

序　言

処女作*White Teeth* (2000) で一躍文壇の寵児となったZadie Smith。彼女は，イギリス人を父に，ジャマイカ移民を母に持つ移民２世である。ケンブリッジ大学在学中に執筆されたという『ホワイト・ティース』(以下，『ホワイト』と略記する) は，そのような彼女の出自を反映したものであり，ジャマイカやバングラデッシュからの移民１世，２世，３世を中心に描いている。よって，当然のことながら，従来の『ホワイト』についての批評は，もっぱら移民の問題，多文化社会としてのロンドンに焦点を当てたものが多い。実際，テキスト中，「今世紀は茶色，黄色，白色の客人の世紀である」("This has been the century of strangers, brown, yellow and white")[1)注1)] というくだりは特によく引用され，移民が大勢住む多民族社会としてのロンドンが鮮やかに活写されているというのが，この作品に対する定着した評価である。確かにそのこと自体は事実であり，この小説の大きな魅力でもあるのだが，これをイギリスのエスニック・マイノリティについての話だと限定してしまうことは，この作品の持つ意義を狭めて解釈してしまうことにつながるだろう。むしろ『ホワイト』において最も注目すべきは，エスニック・マイノリティに限らず，ある特定の価値観だけを信奉し，それ以外をすべて排斥しようとする人々がいかに揶揄的に描かれているかという点であろう。

そういう意味において『ホワイト』は，絶対的信条というものを信じない，と断言して憚らないE.M.フォースターの言葉を想起させるのであり，作品自体について言えば，フォースターに連なるイギリス文学の伝統的姿勢を継承するものであることは疑いない。『ホワイト』のユニークな

2007年２月26日受付．Received February 26, 2007.
水産情報経営学科 (Department of Fisheries Information and Management, National Fisheries University)
別刷り請求先 (corresponding author)：takamoto@fish-u.ac.jp

点は，そういった古くて新しいテーマが，移民問題，遺伝子工学の倫理的問題，仮想現実と現実認識の問題，アメリカ文化帝国主義，フランシス・フクヤマの「超人」論など，さまざまな今日的課題に絡めて扱われていることであろう。よって，本論においては，ある特定の主義のみを正しいとする独善的還元主義に対する風刺が，『ホワイト』においてどのような今日的装いをしているか，そして，それがどのようにして上記の今日的諸課題に対する考察にまで広がりを見せているかを分析したい。

移民とアイデンティティ・クライシス

『ホワイト』の作中，アイデンティティ・クライシスの問題を抱えるエスニック・マイノリティの典型的な例として描かれているのは，バングラデッシュ出身の移民１世Samad Iqbalとその双子の息子の１人Millatである。サマードはデリー大学を卒業した秀才であるが，1946年にロンドンに移り住んだものの，めぼしい職にありつくことができず，しかたなく従兄弟が経営するインド料理レストランのウェイターに甘んじている身の上だ。彼は敬虔なイスラム教徒であり，イギリス人となってもイスラム教徒としてのアイデンティティを守り抜こうとしている。

だが，それは容易なことではない。一例を挙げれば，フリーセックスが横溢するイギリス社会にあって，イスラム教徒に課せられた禁欲の教えを守ることはかなりの困難を伴うのである。窮したサマードは，「右手」を汚してはならないという導師の言葉を「実用主義的」に解釈し，罪悪感に苛まれながらも「左手」で自慰行為に耽る。また，息子たちの音楽教師Poppy Burt-Jonesにのぼせあがった彼は，イスラム教徒でありながら，新約聖書の「テトスへの手紙」の一節「清い人には，すべてが清い」（“To the pure all things are pure”）（139）をお題目のように唱えることにより，自分の不倫すれすれの行為を正当化しようとする。

ポピーとの不倫未遂でイスラム教の教義を逸脱してしまい，いよいよイスラム教徒としてのアイデンティティー喪失の危機に瀕したサマードは，せめて双子の息子Magidとミラトのどちらかだけでも故国の文化の中で育てようと決意する。そうしてバングラデッシュに送り返されたのがマジドであった。だが，皮肉なことにイギリス追従の作家Sir R.V.Saraswatiに心酔したマジドは，イギリス人よりもイギリス人らしくなって帰英するのだ。

イギリスに残されたミラトも，父サマードと同様の悩みを抱えている。17歳になった彼は，父親とは別のやり方，つまり，セックス・フレンドにフェラチオをさせることで右手を使うなという禁欲の教えを守ろうとする。また，彼はイスラム過激派団体KEVIN（the Keepers of Eternal and Victorious Islamic Nation）に属し，その布教活動に大いに貢献することによって，メンバーたちから一目置かれるのであるが，その「布教活動」の内実は，自分のハンサムでエキゾチックな容貌を武器に女性たちを口説くといった方が近い。結局，彼は「イスラム教徒でもなければキリスト教徒でもなく，イギリス人でもなければベンガル人でもない，その中間に生きて」（351）いる「社会的カメレオン」（269）なのであり，「どこにでも所属するがゆえに，どこにも帰属感を持てずにいる人々に特有の怒りと傷心の気持ち」（269）を常に味わわざるを得ないのである。サマードとミラトの苦悩は，移民１世と２世の世代がそれぞれに抱えるアイデンティティ・クライシスの問題を如実に反映していると言える[注2)]。

アイデンティティ・クライシス克服の手段としての宗教盲信

サマードやミラトとは対照的に，宗教にいわばかぶれてしまうことで実存的不安を解消している移民１世もいる。ジャマイカ出身のHortense Bowdenがその好例である。エホバの証人の熱烈な信者である彼女は，最後の審判の日に対する備えに常に余念がない。狂信的と言っていいほどのホーテンスの熱烈な信仰ぶりはユーモラスに諷刺されている。エホバの証人の信者たちは，最後の審判の日が到来し，目抜き通りの溝が不信心者の血であふれんばかりになることを待ち望んでいるのであり（32），とりわけホーテンスは，仲の悪い53番地の住人に硫黄の雨が降り注ぐことを，舌なめずりせんばかりにして待ちかまえている（39）。彼女にとっては自分の主張の正しさが証明されることが何よりも大事なのであり，そのためには他人の不幸さえも願うという，キリスト教本来の博愛精神からかけ離れた心境にあるのだが，本人はそのことに対して全く無自覚である。つまり，ホーテンスの場合は，サマードたちとは異なり，ある特定の価値観を盲目的に受け入れることで実存的不安は抱かないですむものの，危険な独善主義に凝り固まってしまっているのである。

上述のようなサマード父子とホーテンスの例を見てみると，この小説においてはアイデンティティ・クライシスとその克服が移民特有の問題として描かれているように見え

るが，必ずしもそうではない。たとえば，ホーテンスの娘Claraの高校時代の同級生で，勧誘を受けて熱烈な信者となった白人のRyan Toppsも，神から選ばれた人物であると思い込むことによって生き甲斐を見いだすのだが，彼の女性蔑視剝き出しのエゴイスティックな独善ぶりはホーテンスの上を行くものである。

また，ホーテンスの人物造型も必ずしも移民に特有のものではない。というのも，『ホワイト』中にも言及のあるJeanette Wintersonの半自伝的小説*Oranges Are Not the Only Fruit*（1985）のヒロインの養母がホーテンスと酷似しており，ホーテンスのモデルとなっていると思われるが，この狂信的なペンテコスト派信者は労働者階級の白人女性であり，移民問題とは無関係だからだ[2)注3)]。

チャルフェン夫妻の科学盲信

ある特定の価値観を盲目的に受け入れることによって，それをアイデンティティ確立の安易な手段としようとする傾向は，必ずしも移民にのみ見られるのではない。作者スミスがそう考えていることは，次に紹介する白人のChalfen夫妻を見ても明らかである。

ユダヤ人で，著名な遺伝子工学者Marcus，その妻で園芸家Joyce，中流階級のリベラルなインテリであるこのチャルフェン夫妻は，徹頭徹尾合理主義の信奉者であり，その徹底ぶりは，サマードやホーテンスらと同様，スミスの風刺の対象となっている。たとえば，チャルフェン夫妻は子どもたちに幼少よりフロイト学派セラピストによる週５回の個人別カウンセリングを受けさせているのだが，このことについて語り手は，そのおかげで子どもたちがエディプス・コンプレックスを「早めにきちんと経験し，みな純然たる異性愛者」(313) になったのだと述べている。この語り手の口吻から，心の中のことでさえも「科学的」に処理しようとするチャルフェン夫妻に対する揶揄が込められていることは明らかである。

科学信奉者対宗教信奉者という図式で捉えれば，チャルフェン夫妻はホーテンスやサマードらと一見対極を成すように見えるが，１つの主義思想に凝り固まっているという点では，実は同質の人種だと言えよう。価値の相対性を一切認めず，「真実は言語の機能の１つであるとか，歴史は解釈であり科学は隠喩だなどと考えている例の風変わりなフランス人たち」，つまりジャン＝フランソワ・リオタールらポストモダニストたちを鼻であしらう彼らは，「チャルフェン主義者にとって，真実は真実である」(312) とうそぶくのである。この言葉にも明らかなように，ホーテンスらにとってと同様，チャルフェン夫妻にとっても「真実」は唯一無二のものである。彼らにとって「真実」は宗教の教義ではなく科学の知識なのであり，科学がすべての人間の問題を解決するというのだ。

だが，そのような信条とは裏腹に，チャルフェン夫妻もそれぞれに科学や合理主義だけでは解決できない問題を抱えている。妻ジョイスは，子どもたちが巣立ちつつある現在，空の巣症候群気味であり，長男Joshuaのクラスメートである美男子のミラトの「更生を支援」することで生き甲斐を取り戻そうとする。一方，夫マーカスも自分の遺伝子研究に対する世間の非難をまともに受けるに及んですっかり自信をなくし，バングラデッシュから帰英後ずっと秘書を務めてくれているマジドに精神的に頼り切るようになる。この夫婦はミラトたちを支援しているつもりでいるが，実は自分たちこそがアイデンティティの拠り所として，この双子の兄弟を必要としているのであり，かつ，そのことに無自覚なのである(328)。

「純粋さ」という概念のまやかし

これまで見てきたように，『ホワイト』には，ある特定の世界観を信奉することによって，人生のすべての問題が解決できるという錯覚に陥っている人々が多数登場するのであるが，そのような人々は得てして自分こそが「真実」を手に入れることができたという自己満足に浸りきっている場合が多い。そして，この「真実」の探求は往々にして「純粋さ」に対するこだわりというかたちをとっている。たとえば，ホーテンスは「心の清い人々は，幸いである，その人たちは神を見る」（“*Blessed are the pure in heart for they alone shall see God.* Matthew 5：8”）(30)（イタリックは原文通り）と，マタイの福音書を引用して，己の信仰の「純粋さ」を誇り，サマードもまた，前述したように，「清い人には，すべてが清い」(139) をお題目のように唱え，信仰の「純粋さ」を根拠に自分の行為を正当化しようとする。

一方，ホーテンスの孫で，ミラトたちと同い年のジャマイカ移民３世Irieは，血統の「純粋さ」を求めようとする。ジョシュアを通じてチャルフェン夫妻と知り合いになった彼女は，彼らの「純粋さ」に憧れ，チャルフェン家に入り浸るようになる――“She just wanted their Englishness. Their Chalfishness. The *purity* of it”（328）（イタリックは原文通り）。

だが，そのようなアイリーについて，語り手は次のようにコメントしている ―― “It didn't occur to her that the Chalfens were, after a fashion, immigrants too (third generation, by way of Germany and Poland, née Chalfenovsky)” (328)。つまり，スミスは血統の「純粋さ」など求むべくもないことを仄めかしているのだ。そして，ベンガル人ならベンガル人らしく振る舞えと言うサマードに抗弁する妻Alsanaにもこのことを明言させている。

‘[Y]ou go back and back and back and it's still easier to find the correct Hoover bag than to find one pure person, one pure faith, on the globe. Do you think anybody is English? Really English? It's a fairy-tale!’ (236)

第12章の冒頭において，スミスは，園芸家であるジョイスの著書の一節の引用という形をとって，「自家受粉」と「他家受粉」について語り，「他家受粉」の方が良い品種を生み出すと述べている。ここで明らかにスミスは人間についても同じことが言えること，つまり，一つの人種・民族だけではなく，多数の人種・民族が混じり合うことにより，より良い社会を創出することができる，というメッセージを伝えようとしているのであり，翻って「純粋さ」という概念のまやかしを指摘しているのである。

還元主義の危険性

『ホワイト』のプロットは，遺伝子工学者マーカスのFutureMouse©プロジェクトの公開実験計画と，それを阻止しようとする人々の動きをめぐって，クライマックスへと突入していく。マーカスの科学万能主義の粋たるこのプロジェクトは，OncoMouse (Harvard Mouse) という，ハーバード大学で実際に行われた遺伝子工学実験がモデルとなっている。つまり，遺伝子工学技術によって，実験ネズミの体内に発癌遺伝子を生じさせることにより，人工的に癌に罹患させるというものである。マーカスのこの実験は，生命を操作しようとする，神に対する冒瀆行為であるとして，一般人，特に宗教団体の猛烈な反発を買う。予期した以上に大きな反発を受けて当惑したマーカスは，マジドのアドバイスに従い，フューチャーマウスの公開実験を行うことによって，その研究の意義を広く知ってもらおうと考えるが，この実験を阻止しようと目論むのが，ミラトらイスラム過激派団体KEVIN，チャルフェン夫妻の長男ジョシュアら動物愛護過激派団体FATE (Fighting Animal Torture and Exploitation)，ホーテンスらエホバの証人のメンバーたちである。

公開実験に対する抗議行動のやり方をめぐり，上記の団体では議論が百出するが，それらの議論はどれも現実乖離の最たるものを示している。スミスは，ある一つの信条・世界観に凝り固まることが，いかに独善的でアンバランスな現実認識を生じうるかを，ユーモラスな風刺によって見事に描いているのだ。たとえば，KEVINでは，マーカスの記者会見の最中に立ち上がってコーランのスーラ52を朗唱するという作戦を立てる。イスラム教徒にとっては神聖きわまるコーランの言葉も，非イスラム教徒にとってはただの雑音に過ぎず，マーカスたちに何のショックも与えることができないという事実が彼らには認識できないのだ。また，動物愛護テロリスト団体FATEでは，たかだか一匹のネズミの救出に血道をあげることを馬鹿らしいと感じる本音があっても，それを軽々しく漏らすことができない。「ネズミも人間も命の重みに変わりはない」ということをメンバーの一人が言うと，他のメンバーたちは口々に賛同の言葉を呟く。というのも，それは彼らにとって，考えるまでもなく自動的に賛同すべき心情だったからだ (484)。

一方，エホバの証人教会からはホーテンスとライアンらが公開実験会場へと向かう。ライアンはお気に入りの映画『スター・ウォーズ』における悪の化身ダース・ヴェイダーとの一騎打ちの場面を脳裏に描き，正義の使者たる自分が悪の権化マーカスを滅ぼすのだと気負っているが，物語がクライマックスにさしかかったこの時点において，作者はライアンの信仰心がいかに危険な独善性を秘めているかを強烈な揶揄によって明らかにする。作者によれば，ライアンは「単一のものに対してだけ知性を発揮しうる，つまり，一つの考えに驚異的なねばり強さでしがみつく能力」(510) を持つ人間である。そんな彼は，エホバの証人に入信することによって，自分だけが「真実」を語り，「常に正しい側に立つ権利」，つまり，「いつも善人である権利」を手に入れたと考えているのである (510)。

The right to be right, to teach others, to be just at all times because God has ordained that you will be, the right to go into strange lands and alien places and talk to the ignorant, confident that you speak nothing but the truth. The right to be always *right*…. The most fundamental rights of all. The right to be the good guy. (510) (イタリックは原文通り)

スミスはKathleen O'Gradyとのインタビューにおいて，どんな極悪人でも，自分たちの狭い世界観においては自分自身を善人だとみなしていることに強い関心を抱き，それを小説で描きたい，と述べている ——"I am quite interested in showing a collection of people who all think of themselves as good and are all self-justifying and all have a point within their limited sphere[3]." ライアンの人物造型にあたって，スミスの念頭にこの意図があったことは明白だ。ある特定の世界観のみを盲目的に信じ，異なる世界観を一切認めず，すべて悪とみなすことの危険性が上記の引用にはよく現れている。

このライアンと対照的に描かれているのが，この小説の主要人物の中の唯一の白人，アイリーの父親Archibald Jones，通称アーチーだ。第2次世界大戦直後，当時17歳のアーチーは戦友サマードと共に脱走兵さながらの状態で終戦を迎えてしまう。サマードに対する義理から，偶然発見したナチスの科学者Perret博士をいきがかり上射殺しなければならないはめに陥った彼は，「純粋な悪」をペレ博士の中に見ようとする ——"he wanted to see evil, pure evil;…he *needed* to see it"（534）（イタリックは原文通り）。そうすれば良心の呵責に苦しまずにペレ博士を撃てるからだ。だが実際には，彼は引き金を引くことができない。なぜなら彼は，餌食となるべきペレ博士が胸ポケットからひしゃげたタバコの箱とマッチ箱を四苦八苦して引っ張り出そうとしている，そのいかにも人間らしい仕草を見てしまったからだ ——"he opened his eyes to see his victim struggling to pull out a battered cigarette packet and a box of matches from his top pocket like a human being"（535）。このくだりは，George Orwellのスペイン戦争従軍の体験記中のあるエピソードを想起させる。オーウェルはズボンを両手で引き上げながら塹壕の上を走る半裸の敵兵を見つけたときに，その男を狙撃することができなかった——「私はファシストたちを撃つために戦場にきた。だが，今目の前でズボンを引き上げている男はファシストではない。明らかに同じ人間なのであり，撃ち殺す気にはなるものではない[4]。」つまり，ペレ博士射殺失敗のエピソードは，一人の人間を"pure evil"という概念に還元してしまうこと，さらに，"pure"，"truth"という還元主義的な概念の孕む危険性を表していると言えよう。

直線的に進む時間と永劫回帰する時間

人間の「純粋さ」を論じるとき，必ずといってよいほど問題となるのは，血統の「純粋さ」であるが，血統が純粋であることを証明しようと思えば，時を遡って先祖をたどっていかなければならず，それは結局"roots"の探求へとつながっていく。「ルーツ」は，Alex Haleyの*Roots*（1976）以来，民族的出自としての意味が定着しているが，『ホワイト』の作中人物たちは，「真実」や「純粋さ」の探求はそのままルーツの探求であると考えている。たとえば，サマードにとって，ルーツは無条件に肯定されるべきものである ——"To Samad,… tradition was culture, and culture led to roots, and these were good, these were untainted principles"（193）。つまりサマードは，故国の文化に固執することがルーツを持つことであり，そのルーツを探し出すことができればアイデンティティも確立できると考えているのだ[注4]。これとは逆に，マジドやアイリーは，"Time *is* the bitch"（489）（イタリックは原文通り）と考えている。そして，時のしがらみから解放されたいと願っているのである。

作者のスミス自身はルーツの探求について，"That whole kind of 60s, 70s, liberation ethic that you will be released by knowing your roots that you will discover yourself, I just always thought was a crock basically…[5]" と述べ，直線的に過去に遡ることでアイデンティティが確立できるという考えの安易さを批判している。また，時のしがらみを払いのけることについても同様に，スミスは「たわごと」（"a crock"）だと考えているようである。そのことは『ホワイト』のプロット構成に明らかである。というのも，この小説において，時間は決して直線的に非可逆的に進んで行くものではなく，かといって，それぞれの時間が独立したものとして扱われているわけでもないからだ。その顕著な例が各パートのタイトルのつけ方である。この小説は大きく4つに分けられており，各々のタイトルはArchie 1974, 1945／Samad 1984, 1857／Irie 1990, 1907／Magid, Millat and Marcus 1992, 1999となっている。この2つの年の並列は，時が直線的に進んでいるのではなく，過去へとフィードバックされていることを示している。

プロットそのものを見ても，この小説にはひとりの人間が同じことを繰りかえして行ったり，親の世代が行ったことを子どもの世代が行う，といった，「繰り返し」が多い。たとえば，1984年，サマードは当時9歳の双子の息子マジドとミラトのどちらを故国に帰国させるかで悩むが，同様にアイリーも8年後の1992年，胎児の父親である可能性のあるマジドとミラトのどちらに妊娠を告げるべきかで悩む。

また，この小説では射殺に失敗するという事件が2度起

こる。その１つは先に引用したように，アーチーがペレ博士を撃ちそこなったものである。そして，この時のことを語るに際し，作者は同じようなことがサマードの曾祖父Mangal Pandeにも起こったことを仄めかすのだ――“And it was at that moment that it started to go wrong. Like it went wrong for Pande. He should have shot the bloke then and there. Probably（535）.”マンガル・パンデはセポイの反乱のきっかけをつくったベンガル人兵士だ。pandy（暴徒）という名前の語源にまでなった人物でありながら，なぜか上官に向けた拳銃の引き金を引かず，そのまま自殺してしまったのであり，その理由は現在に至るまで不明だったのである。

ペレ博士をめぐっては，さらにもう一つ，同様の事件が繰り返される。彼は結局引き金を引くことのできなかったアーチーから拳銃を奪い，逆に彼の太腿を撃って逃走，その47年後の1992年，マーカスの研究指導者として公開実験会場の雛壇に立つ。そして，彼を狙って今度はミラトが銃を向けるのであるが，そのときペレ博士を守ろうとして咄嗟に身を乗りだすのがアーチーであり，いわば身代わりとなった彼はまたもや太腿を撃たれてしまうのである[注5)]。

語り手のコメントとして，「移民は物事の繰り返しを経験する傾向がある」（161）という文章があるが，一つの主義主張だけを絶対視することによって生じる独善主義の問題が，単に移民だけに関わる問題ではないのと同様，時間が直線的に進むのではなく，いわば円環状に動き，同じ時間を何度も辿る，というテーマもまた，人間全体に関わる普遍的な問題として扱われていると考えられる。小説の最終章において明かされたペレ博士射殺未遂の場面において，サマードとの約束を果たすべく銃を向けるアーチーに対し，ペレ博士は，彼を説得しようとしてニーチェの超人思想に言及する。

‘Imagine, if you *can*, events in the world happening repeatedly, endlessly, in the way they always have… Only those who are sufficiently strong and well disposed to life to affirm it ―― even if it will just keep on repeating ―― have what it takes to endure the worst blackness….’（538-9）（イタリックは原文通り）

時の永劫回帰に耐え，あえて生を肯定することのできる人間だけが，「超人」にふさわしい強さを持つことができるという趣旨のこの文章は注目に値するだろう。要するに，『ホワイト』が主題としているのは，実存的不安に常にさらされている現代人の生き方の問題であり，一見この小説の中核を成しているように見えるエスニック・マイノリティは，彼らの置かれた状況の特殊性のゆえに，この問題が最も先鋭化した形で現れた人々としてクローズアップされているだけなのだと言えよう。

フクヤマの「超人」とアメリカ文化帝国主義

では，この小説においては，どういう人間が「超人」として提示されているのだろうか。それについては，後ほど考察することとして，ここで，未来へ向かって非可逆的に進む時間と循環を繰りかえす時間という２つの時間観の対立に関連して，もう１点検討しておきたいことがある。それは，第18章のタイトル“The End of History versus The Last Man”についてである。これはアメリカの新保守主義政治学者Francis Fukuyama（1952-）の著作*The End of History and the Last Man*（1992）のもじりである。フクヤマのこの著作はソ連など共産主義国家の崩壊を受けて書かれ，アメリカの自由民主主義を称揚するものである。この中でフクヤマは，ヘーゲルの弁証法及びニーチェの超人論を援用して論を展開し，人間の優越願望を満たすという点で最も人間性に合致する自由民主主義こそが，人類が最終的に到達すべき究極の政治思想であるという主張を展開している。つまり，フクヤマにとって歴史はある一定の政治的形態を目指してどこまでも直線的に進んで行くものなのである[6)]。

一方，「最後の人間」とは「超人」の対極にある人間である。つまり，優越願望も持たず，その日その日の物質的安楽に満足しきっている人間だ。『ホワイト』中の「歴史の終わり対最後の人間」という章題そのものは，プロットの内容自体との関連をほとんど持たない。ジョシュアが父マーカスを破滅させなくてはならないことに対して「歴史の終わり」であるという感じに襲われること，また，KEVINのメンバーたちがジョシュアを「最後の人間」，つまり頼みの綱としていることを意味しているだけだ。むしろここでは，『歴史の終わりと最後の人間』が引き合いに出されたこと自体に意味があると思われる。つまりスミスは，ある特定の歴史観を唯一の真実だとみなし，歴史が自由主義の完全実現に向かって直線的に進んでいくと考えているフクヤマのこの著作に否をつきつけているのである。

特定の価値観・世界観を絶対視することによる独善主義の危険性に警鐘を鳴らすスミスは，フクヤマの還元主義的思想が世界的に蔓延することに対しても危惧を感じてお

り，作中にもそのメッセージを盛り込んだものと考えられる。*New Criterion*誌の編集者Roger Kimballも，Leszek Kolakowskiの著書*Religion*を引用して，フクヤマの還元主義的な思想に異議を唱えている[注6]。

Monistic reductions in general anthropology or "historiosophy" are always successful and convincing; a Hegelian, a Freudian, a Marxist, and an Adlerian are, each of them, safe from refutation as long as he is consistently immured in his dogma and does not try to soften it or make concessions to common sense; his explanatory device will work forever[7].

スミスが危惧を抱いていたのは，アメリカの自由民主主義の席巻だけではない。アメリカの大衆文化がグローバル化し，地域ごとの多様なローカル文化が次第に片隅に追いやられ，画一化されつつある状況についても危機感を持っていたのではないかと考えられる。そのことは，この作品においてアメリカの商品・アメリカの有名人が溢れんばかりに登場していることによって間接的に表されている。たとえば，小説中に言及のある有名人をざっと数えてみても，Janis Joplin，Joan Rivers，Elvis Presley，Robert De Nero，Tina Turner，Nikki Tylerなど，アメリカ出身者が約40人，これに対してイギリス人はわずか10人強である。また，企業や商品，映画など，事物に対する言及を見ると，アメリカのものがNike，Godfather I and Ⅱ，Levi jeansなど20件弱，イギリスのものMothercare（乳幼児用衣類のチェーン店），MG，Waldorf Hotel，Mr Sheen（汚れ落としの化学雑巾）などが約20件で，ほぼ同数である。ロンドンを舞台とした小説であるにもかかわらず，登場人物たちの生活は事実上アメリカの大衆文化の多大なる影響下にあると言ってよいだろう。

その中でも特にミラトについてみると，彼はアメリカのギャング映画の大ファンであり，その言動は映画の登場人物たちの影響を相当強く受けている。イスラム過激派団体に入れ込むのも，イスラム教の教えに心酔しているからではなく，アメリカ映画で見たマフィアの義兄弟の契りのようなものをそこに見いだそうとしたからなのである。ペレ博士を撃とうとするとき，彼は自分がお気に入りのアメリカギャング映画の主人公になった気でいるのだ。彼のメンタリティはほとんどアメリカ映画によって作り上げられていると言っても過言ではない。

同じくライアンも，前述したように『スター・ウォーズ』の秘かなファンであり，自分を主人公，マーカスをダース・ヴェイダーにたとえて，勧善懲悪劇を自分が演じているつもりになっている。彼がこの映画を好きなのは，正義と悪が単純明快にはっきりと区別されており，自分を100パーセント善人だと思いたい彼の欲求を十分に満足させるからなのである ―― "The Good! The Evil! The Force! So *simple*. So *true*"（509）（イタリックは原文通り）[注7]。

したがって，フクヤマのアメリカ自由民主主義礼賛に対する作者スミスの批判的眼差しも考え合わせると，この小説をアメリカ文化帝国主義に対する一種のアンチテーゼと見ることもできるだろう。

フクヤマの「超人」と作者スミスの「超人」

前々節において，時の永劫回帰に関して，それに耐えることのできる人間，つまりニーチェの言う「超人」思想が作中に言及されていることを述べた。ニーチェの「超人」思想はフクヤマも自論に援用しているが，フクヤマに言わせると，「超人」とは優越願望を持つ人間である。これらの人間の能力を正しく活用し，社会の発展に寄与させるように持っていくのが理想的なあり方であり，フクヤマはそれこそがアメリカが目指している自由民主主義の到達点である，としている。では，作者スミスの考える超人とはどのような人物なのだろうか。

自分を撃とうとするアーチーに対してペレ博士はサルトルの実存主義に言及し，生の無意味さに耐えて生きることのできる人間こそが超人である，というニーチェの論を出してくる。彼は一見，生の意味をやみくもに探し求めて一元論的還元主義に逃避しようとする人々に対する作者の批判的見方をそのまま反映しているようであり，彼こそが作者の考える「超人」であるような印象を与える。しかし，彼をそのまま作者の代弁者としてみなしてよいかについては，かなり疑問がある。たとえば，ペレ博士の話し方 ―― 「できるものなら想像してみろ」（強調は原文通り），「小僧」（"Boy!"）など ―― には，自分を「超人」であり，アーチーを取るに足らない凡人として見下す唯我独尊的エリート意識がはっきりと見て取れるからだ。

ここで，ペレ博士がナチスの科学者であったことを思いだしていただきたい。ニーチェの思想がナチスに悪用されたことは周知の事実である。たとえば，ナチスの御用学者アルフレート・ボイムラーは，主著『ニーチェ．哲学者にして政治家』を，ニーチェが直観的に得た洞察を自分が発展させて，思想として確立させた成果として位置づけて

いる。高橋透によれば，ボイムラーは，ナチズムはニーチェから直接の資源を得ることはないとしながらも，ナチズムもニーチェもどちらも「権力への意志」に根ざす同じ歴史的運動の方向を目指している点においてニーチェはナチズムの先駆者である，と捉えていた[8]。その歴史的運動の方向とはゲルマン主義であり，「人格破壊をもたらす」ユダヤ民族の撲滅である。

また，ナチスがユダヤ民族を根絶やしにする一方で，優秀な血統であるアーリア人（ユダヤ人以外の白人）を増やすべく遺伝子の研究を重ねていたこともよく知られている。それゆえ，マーカス自身の意図が人類の幸福にあったにせよ，彼のフューチャー・マウスの研究にペレ博士が関与していたという事実がこの研究に何らかの暗い影を落とすことは否めない。つまり，この作品において，時の永劫回帰に耐えうる「超人」とはどのような人間であるかという問題は，ペレ博士に代表されるナチスの科学者たちやフクヤマとは別に，読者が自分で取り組まなくてはいけないものとして提示されていると言えよう。

では，作者のスミス自身は超人としてどのような人物を想定していたのであろうか。結論から言うと，『ホワイト』の中にはっきりとした答えを見いだすことはできない。ただ，大変興味深いことが一つある。それは，一見超人と正反対の，フクヤマやペレ博士，そればかりかニーチェ当人でさえも真っ先に「最後の人間」として槍玉にあげそうな人物，つまり，物質的安楽にどっぷりと漬かり，フクヤマの言う「優越願望」もニーチェの「権力への意志」もごっそり抜け落ちているような人物が，超人とは言わないまでも，それに一番近い人間として描かれているらしいことだ。その人物とは，ペレ博士を撃ちそこなったアーチーである。人が善いだけが取り柄の優柔不断なアーチーは，ダイレクトメールの折り込み作業を生業とする凡庸な白人男性であり，最初の結婚に失敗，再婚相手のジャマイカ移民２世クララからも半ば馬鹿にされ，人種差別意識を持つ同僚たちや上司からは黒人と結婚した変人だと思われている。

こんな彼ではあるが，時の繰り返しに耐えるという点では常人ならざる素質を随所に示すのである。たとえば彼は若いときに自転車のトラック競技でオリンピックに出場したという経歴の持ち主だが，彼の特技は一つのトラックを全く同じタイムで何周も回ることである。また，Claire Squiresも指摘しているように，この作品においては“chance”，“choice”，“fate”などの言葉が随所にちりばめられているのだが，アーチーが運命を味方につけていることは，嵐の夜にたまたま身体の位置を変えたために倒木の下敷きになるのを免れるという偶然にも明らかだ[9]。故国バングラデッシュに帰すことによって息子マジドの運命を変えようとしたサマードの目論見が見事失敗に終わったり，フューチャー・マウスによって一切の不確実性を排除しようとしたマーカスやマジドの実験（“Just certainty. Just certainty in its purest form”）(490) がアーチーによって阻止されるように，運命に逆らい，神を演じようとする作中人物たちの試みがことごとく水泡に帰する中で，アーチーの運任せの生き方はある意味で肯定されているようである。

もちろんアーチーのようにコインを投げ上げて自殺するかどうかさえも決めるというのは，無責任きわまりない態度であり，このような言動をそのまま超人のそれだと言うことはできない相談だ。これまでのプロット分析結果から考えても，コインの表か裏か，という二者択一的生き方が作者によって肯定されているとも到底思えない。しかしながら，運命にあらがうことなくそのまま受け入れ，人種差別など思いもよらず，「人々は平和に仲良く，そんな感じで暮らすべきだ」(190, 194) と考える彼が，最終的に２度までも殺人をくい止めたばかりか，実験ケースのガラスを割ってフューチャー・ネズミを脱出させるという，みんながやろうとして結局失敗に終わったことをやってのけることを考えると，スミスが彼に何らかの希望を託しているとは言えるだろう。そう考えると，ペレ博士とマーカスに「この先に何の謎が待つわけでもなく」，「いつ死が訪れるかについて疑いの余地もない」(489) 運命を与えられた実験ネズミが，それでも生の自由を求めて逃げだして行く，その姿に向かって“*Go on, my son!*”(542)（イタリックは原文通り）と送り出すアーチーの言葉によって，540ページ強のこの長編小説が締めくくられていることは，大いに示唆的であると考えられる。

結　語

以上の考察から明らかなように，『ホワイト』は，単に多文化社会としてのロンドンを活写したというにとどまることのない，普遍的なテーマを持った奥行きの深い作品であると言える。還元主義的価値観のみで人生を理解しようとする作中人物たちを諷刺することにより，「純粋」，「真実」，「進歩」などを無条件で肯定する態度の安易さ，危険性を浮かび上がらせるのみならず，さらに，間テキスト性を用いることにより，フクヤマの自由民主主義礼賛やナチスのゲルマン主義などの還元主義的世界観に対する批判を

も作品に込めているのである。

今から見ると特に意味深長に思われることに，2000年に発行されたこの小説の最後のパートの題辞には，“fundamentalism”の定義（“Of or pertaining to the basis or groundwork ; going to the root of the matter”）と，アメリカ映画『カサブランカ』のテーマソングの歌詞の一部（“…The fundamental things apply,/As time goes by”）が挙げられている（413）。この作品を読むと，“fundamental”なものの存在を措定し，それを追求して足れりとする安易な生き方に逃げ込まない勇気を人間一人一人持つことができていれば，イスラム原理主義者による2003年の同時テロもあるいは避けられたかもしれず，また，アメリカにしても，イラク戦争を正義の戦争だと決めつける独善主義に陥らなくてもすんだのではないか，と思わずにはいられない。

注

注１）以下，*White Teeth*からの引用はすべて本文中にページ数のみを記載する。なお，日本語訳にあたっては、小竹由美子訳を参考にさせていただいた[10]。

注２）移民が抱えるアイデンティティ確立困難の問題は，アンドリュー・ローゼン著『現代イギリス社会史1950-2000』[11]に詳しい。それによると，移民１世にとって母国はいつの日か帰るべき美しい楽園なのだ。だが，その子どもの世代は，親の世代のように母国の文化に同化することができないばかりか，母国を訪れてみても，その貧しい生活を見てショックを受けるのが普通である。かといって，まわりの白人多数派に同化することもできない以上，彼らは自分たち自身で第３の道を模索する以外に道はないのである。

注３）*Oranges Are Not the Only Fruit*にも，ライアンのように，自分こそが神から選ばれた人間であるという優越感を持ち，露骨な女性蔑視に凝り固まったSpratt牧師が登場する。

注４）ホーテンスも同様で，“The Witness church is where my roots are”（409）と言う。なお，板倉厳一郎氏は，“root canal”（歯根管）という比喩に注目し，歯根管と真っ白い入れ歯という比喩の分析により，『ホワイト・ティース』のテーマを検証している[12]。

注５）この他にも，同じようにテレビ漬けとなるDarcus（ホーテンスの夫）とサマード（438），部屋の物をすべて使って自分の意見を主張するサマード・アーチー（252-3）とマジド・ミラトなど，同じことの繰り返しは随所に見られる。

注６）Leeds UniversityのDave Gunningも，2005年９月２-３日に行われたLancaster Universityでの“The Twenty-First Century Novel : Reading and Writing Contemporary Fiction”というConferenceにおいて，Zizekの多文化主義批判を援用しながら，スミスがフクヤマの「近視眼的」歴史観を批判しているという趣旨の口頭発表を行っている[13]。

注７）ミラトやライアンがアメリカ映画のファンであるという設定は決して看過できない。というのは，ポストモダン社会において，虚構と事実の境界は限りなく不明瞭なものとなりつつあり，事実が虚構を模倣することすら珍しくないからであり，現代において映画やテレビが大衆に対して提供する仮想現実の持つ影響力はますます大きなものとなりつつあるからだ。アーチーも，公開実験場を見て「まるでテレビみたいだ！」（520）と本末転倒の感想を持つ。また，現実がフィクションを模倣するという傾向については，他の作家も作品で取り上げている。たとえば，社会から隔離されて暮らしている臓器移植用クローン人間たちを描いたKazuo IshiguroのNever Let Me Go（2006）の中にも，主人公Kathyが先輩たちの言動に違和感を覚え，よく考えてみると，それがテレビドラマの模倣であることに思い当たるというくだりがある[14]。

引用文献

１）Smith Z: White Teeth. Penguin Books, London, 326 (2000)

２）Winterson J : Oranges Are Not the Only Fruit. The Atlantic Monthly Press, New York (1987)

３）O'Grady K : White Teeth : A Conversation with Author Zadie Smith. *Atlantis : A Women's Studies Journal*, 27, 105-111. 24 Feb. 2007. <http://bailiwick.lib.uiowa.edu/wstudies/ogrady/zsmith 2004. htm>

４）Orwell G : Looking Back on the Spanish War. *In*: *Orwell in Spain*. Penguin Books, London, 349 (2001)

５）O'Grady

６）Fukuyama F：歴史の終わり（上・下）（渡部昇一訳），

三笠書房，東京（2005）：The End of the World and the Last Man. Free Press（1992）

7）Kimball R：Francis Fukuyama & the end of history. *The New Criterion*, 10(6). 25 Feb. 2007 〈http://www.newcriterion.com/archive/10/feb92/fukuyama.htm〉

8）高橋透：アルフレート・ボイムラーのニーチェ解釈——ナチスによるニーチェ読解の一断面．テクスト研究，1，53-66（1996）

9）Squires C：Zadie Smith's *White Teeth* —— A Reader's Guide. Continuum, New York and London, 52-55（2002）

10）Smith Z：ホワイト・ティース（上・下）（小竹由美子訳），新潮クレストブックス，東京（2001）

11）Rosen A：現代イギリス社会史1950-2000（川北稔訳），岩波書店，東京（2005）：The Transformation of British Life, 1950-2000 —— A social history. Manchester Univ. Press, Manchester, 132（2003）

12）Itakura G：A 'Happy Multicultural Land' in Periodontal Terms: Zadie Smith's *White Teeth*. 英文學研究，83，125-142（2006）

13）Gunning D, "Fukuyama, Zizek, and KEVIN：*White Teeth*'s critique of multiculturalism." Online. 25 Feb. 2007. 〈http://www.lancs.ac.uk/depts/english/news/21stC-conf-sessions.htm〉

14）Ishiguro K：Never Let Me Go. Alfred A. Knopf, New York, 121（2005）